

菅原人氏の四国遍路

星野英紀

相変わらずの巡礼ブームである。カイドブックの類いもいせんと渋谷出版されている。日本の巡礼ブームは、江戸時代以降でも何度もあった。ブームのきっかけを作るのは、旅行環境の変化、改善である。道中安全や宿泊設備の向上、輸送機関の改善などなど。一九六〇年代ぐら
い以降は、経済の発展、輸送手段の向上が著しかつた。



だからといった急ぎの取材である。加えて当然のことながら、政治部系の記者であるから、巡礼や四国遍路の反世俗性や象徴性といった四国遍路の文化面・宗教面に関心があるわけではない。いわば、遍路のことなんか考えていては政治はうまくいかないのではないか、といったニアンスでの取材であつた。

そういう立場にたてば 私はかねてより 日常に對立する非日常世界としての巡礼、四国遍路という圖式で遍路を考えていることも確かであるから、マスコミの話に合わせた四国遍路解釈を展開することもできる。つまり四国遍路の醸し出す世界や価値觀は、反世俗的、聖的であるから、政治のような極めて世俗的世界の問題解決に簡単に結びつかないではないか、というような視点を話した。慌ただしい取材であるから、世俗的權威の最高位にある人つまり内閣總理大臣が巡礼に関心を持つたということ、持ったばかりか実際に歩き巡礼をしているというところが、実は四国遍路にとつて“幽期的意義”を持つてゐることに触れるには至らなかつた。

1

菅直人氏の四国遍路行がなぜ“画期的意義”を持つのか。菅さんのような四国遍路実践は、四国遍路史上、未曾有の出来事といつてもいい。過去一〇年間ほど日本の政治の中枢にいたような社会的高位者が、在任中からほのめかし辞任した直後に実際に四国遍路を巡るなどといった話題は、四国遍路には今までないのである。かつて一九六〇年代に首相を務めた故池田勇人氏が四国遍路を巡ったことがあるといわれているが、それは首相になるずっと前の若い頃の

話で、母親に連れられてと言われている。社会の高位者とは当該社会の中心的地位を占めてしる人といった意味である。だからかつての武家社会であれば大名などがそれにあたるし、その前であれば貴族である。皇族も高位者といえよう。

伝説の開創説から数えれば、一二〇〇年ほどの長い歴史を持つ四国遍路ではある。しかし四国遍路の歴史では、社会的高位者つまり“偉い人”的巡礼者が目立たないことで有名である。最近では有名な芸能人の遍路ファンもないことはないが、有名人イコール社会的高位者ではない。日本の巡礼史研究の泰斗であつた史学者故新城常三博士によれば近世の四国遍路の特徴のひとつは、他の巡礼に比して“病人と乞食と女子供”が多いことなのだ（『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』）。つまり社会的劣位者が四国遍路の主役なのであつた。日本の最高権力者であつた前首相がお遍路に出るなどということは、遍路史上未曾有のことといつてよい。

現代日本でも政治家が宗教施設に出向くことは少なくない。首相のケーラスていえは毎年新年になると日本の首相は一陣を組んで伊勢神社に参拝する。菅首相も平成二三年一月四日、伊勢神宮に一行とともに参詣した。多くの国民は毎年のことのように行われるこの首相伊勢参拝にさして興味を持つていないのであるが、中には、この行為は憲法違反であるとする意見もあるのである。

「伊勢神宮は、特定の宗教である神社・神道の本宗とされる神社であり、かかる極要な神社に首相が閣僚と共に参拝することは、憲法20条第3項の、国及びその機関は、いかなる宗